



人生の満ち潮・引き潮

永田円了

Aging Wise

人生には物事を積極的に創造し、その豊かさを体験する“満ち潮”の時代、一方それまで創り上げてきたものが、一つ一つ崩れゆく“引き潮”のステージがある。満ち潮時代に培ってきたものが手のひらからこぼれ落ちるように、無くなって行くとき、人は苦しみ、悲しみ、将来に対する不安の感情にさいなまれる。

もともと“人は裸で生まれた”にもかかわらず、もっともっと所有したい、すべてのことを自分の思い通りにしたい、という欲望は無くなることはない。欲望という名のエゴの存在は、満ち潮時代には、人を他者との競争にかりたて、引き潮時代には、今まで創り上げてきたものが無くなってゆくことへの恐怖心を投げかける。さて、このやっかいなエゴ（自我意識）とどうつき合っていけばいいのか。特に引き潮ステージにおいての意識について考えてみたい。

姥捨て山 三つのバージョン

江戸時代、口減らしのため働けなくなった老人を山に捨てる風習があった。経済的価値をもはや生み出せなくなった人をこの世から無くし、社会の負担を軽減する仕組みをつくったのである。

三つの物語を事例とした。一つは「櫛山節考」。年老いた母を山に捨てる息子、背中におんぶされながら息子を気遣う母親の無償の愛、村の掟に従順に従う“第一のみち”の物語である。二つ目は、「デンデラ」。老母が山に捨てられるところまでは同じ、しかし物語はそこから始まるのである。捨てられた老母たちがとった行動とは、自分たちを捨てた村人に復讐をすることであった（第二のみち）。

三つめは、「わらびのこう」。最初は村の掟に従順に従って死をうけいれていこうとする。しかしある時点から“いのち”の尊さを掟に優先させることを決め、みなで協力して命を繋いでゆく。最終的には、掟、しがらみ、エゴ、から解放された彼女たちの魂は自由に遊ぶ。身体がなんと軽いことか、人間本来こんなに軽く愉快な存在だったことを悟る（第三のみち）。 引き潮時の姿がこんなにも幸せなものになりえるのか、「わらびのこう」の物語は一見の価値がある。



老年的超越



日本は今や100歳を超える百寿者が5万9000人に達する。今までできたことがだんだんできなくなってくる老年期を生きることは、果たして不幸なことなのか？ 1000人規模の百寿者への聞き取り調査で見えてきたものは、身体の健康と心の健康は必ずしも関係しないということだった（大阪大学、権藤恭之准教授）。調査の結果は、加齢に伴って、むしろ幸福感が高まるというものだった。身体機能の低下にもかかわらず、今の暮らしを肯定的に捉える感情や、今の状態の満足感が高まっていくことが分かったのである（クローズアップ現代）。

70歳代ぐらいまでは、できない自分を認めたくない感情や、老いや死に対する不安があったものの、さらに年を重ねると、そうした感情や不安はうすれ、穏やかで幸せな感情につつまれるという。

今まで自分縛っていた自我意識（エゴ）が抜け落ち、ありとあらゆることに幸せを感じるという“多幸福感”、百歳まで生きなければ達成できないのか？ いや、いま達成したい。

<事例 DVD>

「最後のレッスン キューブラ・ロス」Eテレ 2004/12/25
40年間神に仕えてきて、引退したら脳卒中、神よ、あなたはヒトラーだ！
多田富雄の満ち潮・引き潮、NHKスペシャル「脳梗塞からの再生
免疫学者・多田富雄の闘い」2005/12/4 今の方がよく生きていると言える
映画「櫛山節考」、今村昌平監督 1983年 捨てる子を愛おしむ母
映画「デンデラ」今村昌平の息子・天願大介監督が奥谷山伝説の後日談を映画化 2011年
映画「わらびのこう」名匠・恩地日出夫監督作品 2003年 老いてこそ分る命の尊さ
「百寿者 知られざる世界～幸せな長生きのすすめ～」クローズアップ現代 2014/10/15
Eテレ スイッチインタビュー「見えない 聞こえない世界で」/福島智 2017/4/22
ヨイトマケの唄、三つのバージョン
森進一 悲しんでいる（第一のみち） 美輪明宏 怒っている（第二のみち）
中村美津子 感謝している（第三のみち）

